

目 次

かながわの考古学

（Ⅰ）かながわの考古学概論

（Ⅱ）かながわの縄文時代

（Ⅲ）かながわの古墳時代

（Ⅳ）かながわの奈良時代

（Ⅴ）かながわの平安時代

（Ⅵ）かながわの室町時代

（Ⅶ）かながわの江戸時代

（Ⅷ）かながわの明治時代

（Ⅷ） 鎌倉時代の研究

2013.3

公益財団法人 かながわ考古学財団

目 次

神奈川県における旧石器時代の遺物分布(その6) - B 2層 - 旧石器時代研究プロジェクトチーム	1
神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅹ —後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その4— 一堀之内2式土器の変遷— 縄文時代研究プロジェクトチーム	11
神奈川県内出土の弥生時代土器棺(2) - 弥生時代中期後葉から古墳時代前期 - 弥生時代研究プロジェクトチーム	23
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡(10) - 通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介 - 古墳時代研究プロジェクトチーム	34
神奈川県における古代の鉄(3) - 生産関連遺物の集成 - 奈良・平安時代研究プロジェクトチーム	44
神奈川の中世城館(5) 中世研究プロジェクトチーム	71

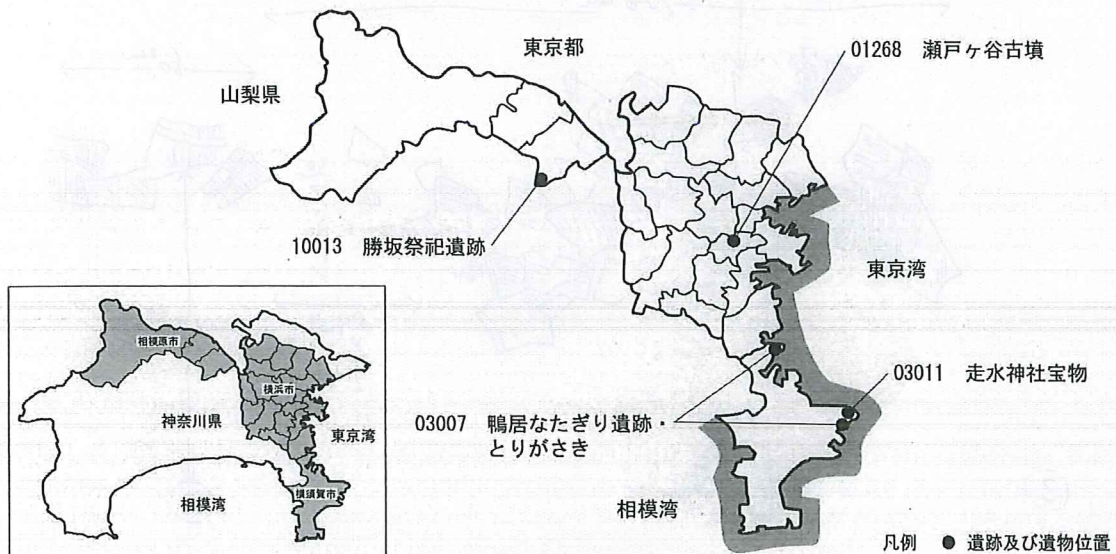
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡(10)

一通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介

古墳時代研究プロジェクトチーム

例 言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・研究紀要第18号には横浜市域にあたる01268番、相模原市域の10013番、横須賀市域の03007・03011番を掲載している。
- ・番号は埋蔵文化財センター年報14～18に記載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は横浜市01268番：植山英史、相模原市10013番：新山保和、横須賀市03007番：小西絵美、03011番：柏木善治が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1.の細目は[調査(踏査)年月][資料保管場所][記載内容概略]とし、2.は[(遺跡及び)遺物(遺構)概要][掲載図書][掲載図書概略][小結]などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- ・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。



第1図 対象遺跡及び遺物位置図

年報番号 横浜市 01268 瀬戸ヶ谷古墳 (7) 横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷

1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月] 1943・1950年

[資料保管場所] 東京国立博物館

[記載内容概略]

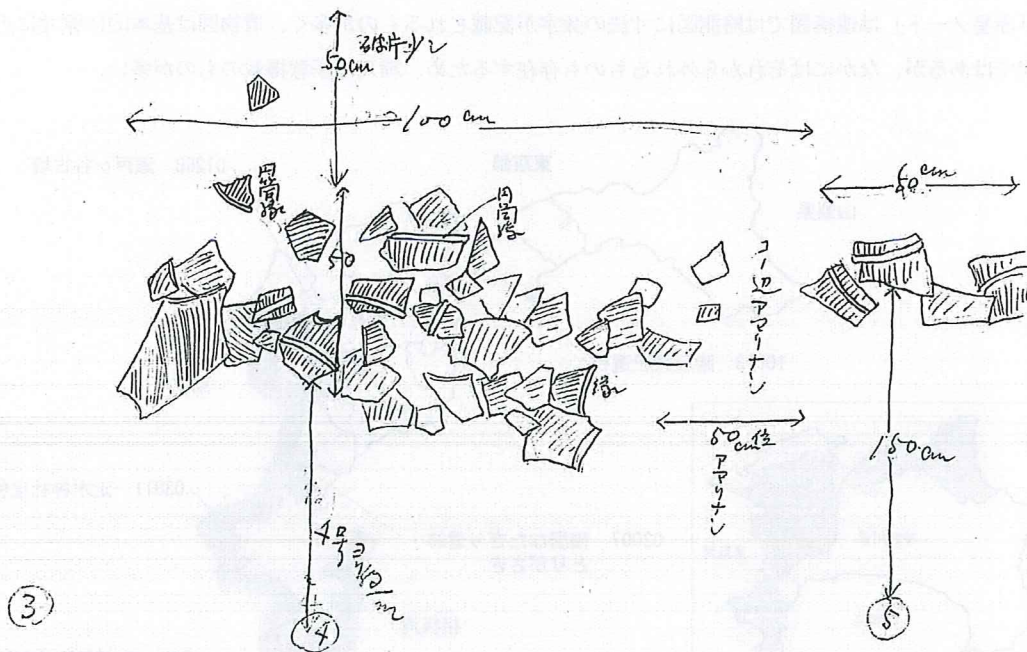
[瀬戸ヶ谷古墳と赤星ノート7]

前回に続き、12268-1(3)にあたる方眼ノートの記載内容について見ていくこととする。方眼ノートは昭和18(1943)年時の調査内容について、埴輪の出土位置や出土状況等を記載したもので、前々回・前回は後円部の西側斜面でくびれ部に向けて並ぶ埴輪列の概略図、出土位置スケッチについて紹介した。

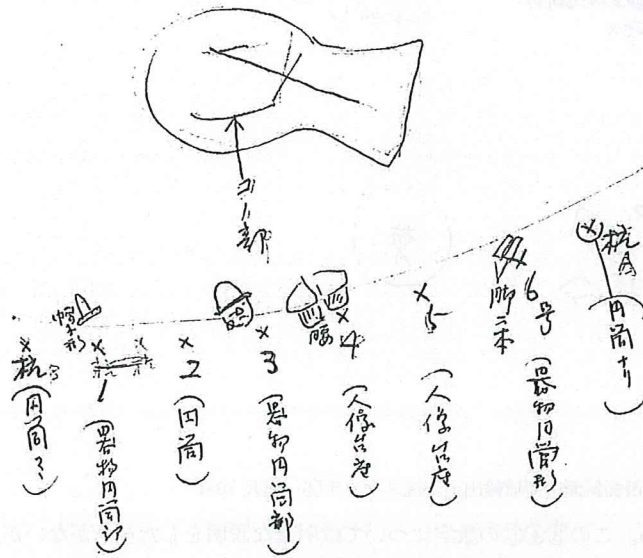
今回紹介する図はそれに続くページに描かれたものである。第2図は円筒埴輪の出土状況スケッチで、左上隅に「18年8月1日調」とインクで、右隅には縦書きで「八月一日」と鉛筆で書かれている。出土状況のスケッチ及び図の距離はすべて鉛筆の下書きをインクでそのままなぞる、または若干位置を変えて書き直したものである。図の内容は円筒埴輪が散乱して出土した状態が描かれており、口縁部には「円筒縁」の記載が為されている。ページ左から中央一帯には、斜面に平行する距離約100cm・幅50cmの間の円筒埴輪出土状況が描かれ、上方50cmは「破片少し」と書かれている。また、右側50cm程は「コノ辺アマリナシ」と記されている。その右側は距離50cmに渡って再び円筒埴輪と思われる破片の出土状況が描かれている。下端には右から③④⑤と数字が書かれており、中央の出土状況は「4号ヨリ約1m」と記され、左側の出土状況は

18年8月1日調

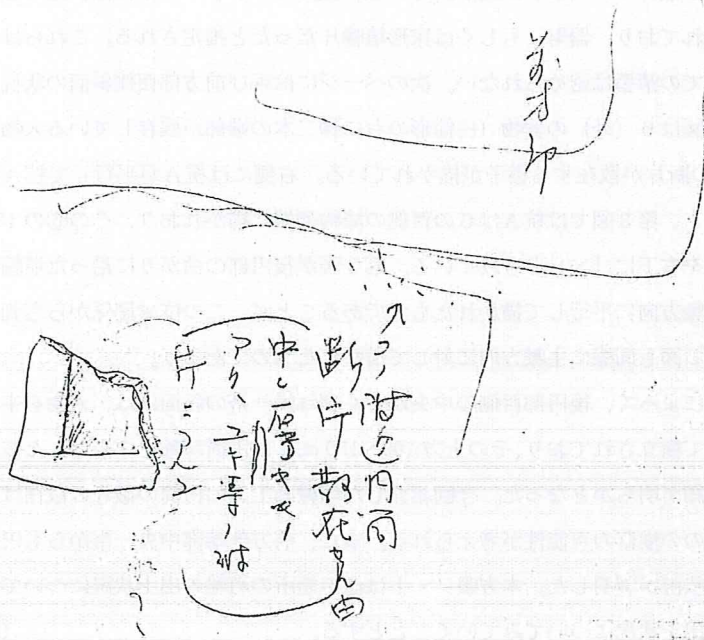
5/2/1



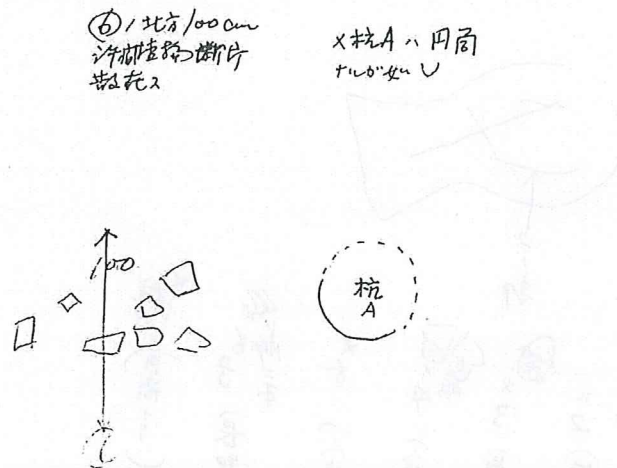
第2図 西側斜面円筒埴輪出土状況スケッチ① (縮尺70%)



第3図 埴輪出土位置スケッチ② (再掲図) (縮尺70%)



第4図 前方部埴輪出土位置概略図 (縮尺70%)



第5図 西側斜面円筒埴輪出土状況スケッチ② (縮尺 70%)

矢印で⑥から 150 cm と記されている。この③④⑤の数字については明確な説明をした箇所がないが、前後関係から前々回紹介した埴輪出土位置スケッチ①②に描かれた、埴輪列に振られた左から「B・1～6・A」の番号を指していると考えられ、ここで同図を再掲する(第3図)。従って、第2図の左から中央は前々回紹介したスケッチ第3図で4と振られた人物台座より墳丘頂部側に約1 m、右側は5と振られた人物台座から同じく墳丘頂部側約150 cmの状況を描いたものであろう。

次のページには、前方部の埴輪の出土について記載されている。第4図には前方部端中央一帯にドットと考えられる点が描かれ、「コノ付近円筒断片散在せん由」と()書きで「中に厚キモノアリ、ユキ等のハ片二〇〇」と記載され、右側にその破片のスケッチが描かれている。破片のスケッチの下には、先の記載から棒線が引かれ、「家の」と書かれており、器財・もしくは家形埴輪片だったと推定される。これらは、すべて鉛筆で書かれており、インクでの清書は認められない。次のページには再び前方部西側斜面の状況と考えられる状況描かれている。第5図は6(号)の器物(円筒形の台に脚二本の端部が残存している人物埴輪)から北方100 cmの位置に埴輪の断片が散在する様子が描かれている。右側には杭Aが平行して杭Aの位置「×」と径「円筒ナルが如し」と、第3図では杭Aは6の西側の埴輪列端に描かれおり、その⑥の100 cm北側を描いた本図では、位置はやや右下に「×」とされている。第3図が後円部の曲がりに沿った埴輪列を表現したものに対して、本図は主軸方向に平行して描かれたものであることが、この位置関係からも判る。位置関係や距離等の表現が同じ第2図も同様に主軸方向に対して描かれたものであろう。

前々回から紹介してきた資料によって、後円部西側の中央からくびれ帯の斜面には、人物を中心とした埴輪列が後円部の形状に沿って樹立されており、その上方100～150 cmには円筒埴輪を中心とした破片が散在している様相についてその詳細が明らかとなった。今回紹介した埴輪列上方の円筒の破片の散在は、墳頂部に樹立された個体が割れたものの崩落の可能性が考えられる。また、前方部端部中央一帯からも円筒埴輪片に形象埴輪を含む破片の出土状況が判明した。本方眼ノートは他の箇所の埴輪の出土状況についても詳細が記されており、次回引き続き出土状況についてみていくこととする。(植山)

年報番号 相模原市 10013 勝坂祭祀遺跡(2) 相模原市磯部字勝坂 1904

1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月日]

赤星氏のメモに年月日の記載は認められない。

[資料保管場所]

個人蔵

[記載内容概略]

前号では、明治村通信の封筒に入っていた資料について紹介したが、本号も引き続き本封筒に入っていた資料について紹介する。

今回詳細する資料は、県史考古資料の神奈川県内主要遺物調査表1通で、県史考古資料Aと書かれている。この資料には、表面と裏面の両方に記載がある(第6図)。

表面には、神奈川県相模原市勝坂祭祀遺跡の出土遺物について書かれている。出土遺物の概要として、青銅儀鏡3・石製模造品(鏡1・勾玉6・白玉54・大白玉3・刀子1・剣形16・双孔円板2・単孔円板2・子持勾玉1・碧玉製管玉大形1)・手捏土器2(木葉を押圧した底部もあり)・土師器(小壺・坏・高坏)と記載されており、土師器については丹塗りが多いと記載されている。また、土器の時期について和泉期・鬼高期と書かれている。青銅儀鏡について、「いずれも小形鏡で、一つは欠けている。最小の鏡は径4.3cm、背面に鋸歯文と珠文がみられ、面の反りもあって小形仿製の内ではいいいに作られたものといえる」のコメントが記載されている。また下段には、遺跡の時期・性格について、「土師器から和泉期・鬼高期があることから継続的に形成されたと考えられる。石製模造品は時代により精粗・材質の異なるものがある。最低2グループに分けられ数回にわたって行われた祭祀跡であると理解される。」と述べられ、「子持勾玉は県下3番目の出土、水神信仰特有の馬形はみられない。5世紀前半から6世紀へかけて水霊を祭った遺跡と証明される」と書かれている。

裏面には本遺跡の概要が記載されており、「相模川の河岸段丘が鳩川によって開析され浅い谷をつくっているが、その一部の水田中から遺物が発見された。畑を1メートル弱掘り下げ、水田に改変した際出土したとのことで、この地より上流約100メートルの崖下には湧水地点があり、かたわらに有鹿神社の石宮が建てられている。この社の伝説に蛇が度々現れることも水神らしく、社も崖下の低湿地に占地している。かつて和鏡も発見されているというが、延喜式神名帳相模国高座郡有坂神社との関係も考えられて興味を持たれる。口絵に原色版 現地写真と遺物写真がある。」と述べられている。その記載の下には、「関東」と梶山林継氏の名前が記載されており、『神道考古学講座 第2巻 原始神道期一』「古墳時代の祭祀遺跡」との著作名が書かれている。その下段には、県下から出土した子持勾玉出土地名が記載されており、「三浦三戸1…湧水地、湯河原竹の花遺跡1…湧水地、勝坂1…湧水地」と書かれている。その他に、「P16 伴出土器のこと」「小出義治氏」との記載も見られる。

2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

本資料は、神奈川県相模原市勝坂祭祀遺跡について書かれている。本遺跡は、昭和47年6月に刊行された『神道考古学講座 第2巻 原始神道期一』に「神奈川県勝坂」として紹介されたのが初見と見られる。記

載内容を見ると、椚山林継氏の名前と著作が記述されているので、その資料のデータを元にして赤星氏がコメントを加筆して記載したものと見られる。その中で、赤星氏は、石製模造品に注目し、製作技術の精粗や石材の相違から、最低2グループに分けられた継続的な祭祀を想定している。また、子持勾玉が出土していることから、水神信仰との関係性を指摘しており、延喜式神名帳相模国高座郡有坂神社が隣接地に所在することにも興味を抱いている。本資料は、同封されている資料から『神奈川県史 資料編 20 考古資料』を作成する時に集めた基礎資料と見られる。今回の資料は、その時の調査資料の一部であり、他の資料も多数あることから、次回以降も継続して資料紹介を進め、内容を精査することとしたい。(新山)

引用・参考文献

- 大場磐雄 1972 『神道考古学講座 原始神道期一』第2巻 雄山閣出版
- 神奈川県県民部県史編纂室 1979 『神奈川県史』資料編 20 考古資料
- 相模原市 2010 「勝坂有鹿谷祭祀遺跡資料報告書」『相模原市史調査報告書』6

県史考古資料A

神奈川県内出土遺物所蔵者調査表 年 月 日調査

		調査者	
所蔵者	住所		
主 要	神奈川県 相模原市 勝坂 祭祀遺跡		
出土品	青銅儀仗 石製模造品		
と	出土地		
<p>調査 1. 勾玉 6. 磁器 54. 木燄石 3 2. 1. 345 15. 72. 177 42. 中世銅貨 子持勾玉 1 古銅貨幣 2 等 1 枚</p> <p>付録 土器 2 不器 1 枚 1 枚 1 枚 1 枚 土器 等 ... 小皿. 杯. 茶碗 ... 丹塗 6 等 和洋器 ... 銅器 等</p> <p>出土品は 銅器 陶器 土器 石製模造品 子持勾玉 2 種類 1 種類 1 種類 1 種類 1 種類 1 種類 1 種類 2 種類 1 種類 1 種類 1 種類 1 種類 7 種類 1 種類 1 種類</p> <p>子持勾玉 1 枚 1 枚 1 枚 1 枚 1 枚 1 枚 1 枚 合計 1 枚 1 枚 1 枚 1 枚 1 枚 1 枚 1 枚</p>			
記 録	神奈川県志 第 2 巻 第 2 章		
存 否			
目 表	作製 昭和 年 月 日		

神道
相模川の成谷段丘の麓にあり、その下には
水神信仰の遺物が見られる。この遺物には、
延喜式神名帳の記述と一致するものがある。
また、この遺物には、相模原市の歴史と
関係があるものがある。この遺物には、
延喜式神名帳の記述と一致するものがある。
また、この遺物には、相模原市の歴史と
関係があるものがある。

「鹿下」 相模原市

（神奈川県志 第 2 巻 第 2 章 祭祀部 延喜式神名帳） 関係あり

鹿下
子持勾玉 出土地 ... 土師 3 中 1 ... 割く地
湯涌 1 中 1 ... 湯涌地
勝坂 1 ... 湯涌地
P. 65 出土品 等 2

小島信一氏
相模原市

第 6 図 県史考古資料 A

年報番号 横須賀市 03007 鴨居なたぎり遺跡・とりがさき 浦郷町・鴨居二丁目所在

1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月]

資料が収められている封筒には株式会社着洋社の銘があり、封筒の宛名は赤星氏個人となっている。料金別納郵便で送られたようで、封筒に消印等の日付は残されていない。また、封筒内の資料にも日付は記載されておらず、資料に関する年月は定かではない。

[資料概略]

封筒の裏面には赤星氏の筆跡で「鴨居なたぎり資料図 とりがさき横穴分布写真(貴重資料)」と書かれており、その脇には「要保存赤」と書き添えられている。

資料は2種類のものがあり、一つ目は鳥ヶ崎洞窟に関するもの、二つ目はなたぎり遺跡に関するものである。鳥ヶ崎洞窟に関する資料には、その概略が記されていると共に、横穴についての説明が記載されている。資料に貼付された写真には複数の開口部を有する斜面がとらえられており、写真右下付近の開口部には作業をしている人の姿が小さく写り込んでいる。写真からは、斜面に穿たれた開口部が少なくとも7箇所以上あることがうかがえる。写真右端には赤色で「鳥ヶ崎洞窟□□」と書き込まれているが、赤色のインクがぼやけてしまっているため末尾2文字は判読できない状態である。

もう一方の資料については、幾度にも折りたたまれた状態で封筒に納められており、その裏面の一角には墨書きで「原史時代遺物 (鴨居八幡 なたぎり)」と記されている。開いた状態の資料は横約 109cm、縦約 77cm を測り、概ねB 1判に相当する大判サイズである。資料の左端にはやや大きめの文字で書かれた「原史時代遺物(住居址発掘品)」という表題があり、紙面には考古遺物を模写したスケッチが描かれている。紙面中央には「(左)横須賀市鴨居八幡社境内」、「(右)横須賀市浦郷町なたぎり」と書かれており、それぞれ当該地からの出土遺物であることが分かる。紙面左側には鹿角製刀子柄、刀子、石製刀子模造品、鎌、骨製品、角製品、貝釧、瑪瑙製曲玉、骨製鎌が、右側には骨製・角製品、滑石製容器、鉄鎌、土製管玉、土製小玉、土製曲玉、滑石製模造品、滑石製白玉がそれぞれ描かれている。スケッチは墨書きしたものに彩色されており、一部の遺物には鉛筆書きによるメモが認められる。

2. 記載資料の整理

[遺跡・遺物概要]

鳥ヶ崎洞窟は大正 13 年の山腹切崩工事に際に発見され、同所に所在する鳥ヶ崎横穴群も同様に発見された。横穴群の正確な数は分からずおよそ 60 基とされており、調査が行われたのは数基である。資料に添付された写真は、その一端を写したものと考えられる。一方のスケッチに描かれた遺物は、鴨居八幡社境内貝塚及びなたぎり遺跡から出土した遺物である。赤星氏が作成したなたぎり遺跡の報告書にはこのスケッチと近似した遺物の図が掲載されていることが確認できるが、両者の時期的な前後関係は定かではない。

[掲載図書]

これらの資料が掲載された文献等は、管見に及ぶ限り見当たらない。

(小西)

引用・参考文献

赤星直忠 1954 『横須賀市なたぎり遺跡 横須賀市史別冊』 横須賀市博物館
赤星直忠 1955 「神奈川県鴨居の八幡社貝塚」『日本考古学年報』3 日本考古学会
神奈川県民部県史編集室 1979 『神奈川県史 資料編 20 考古資料』 神奈川県



写真1 鳥ヶ崎洞窟写真

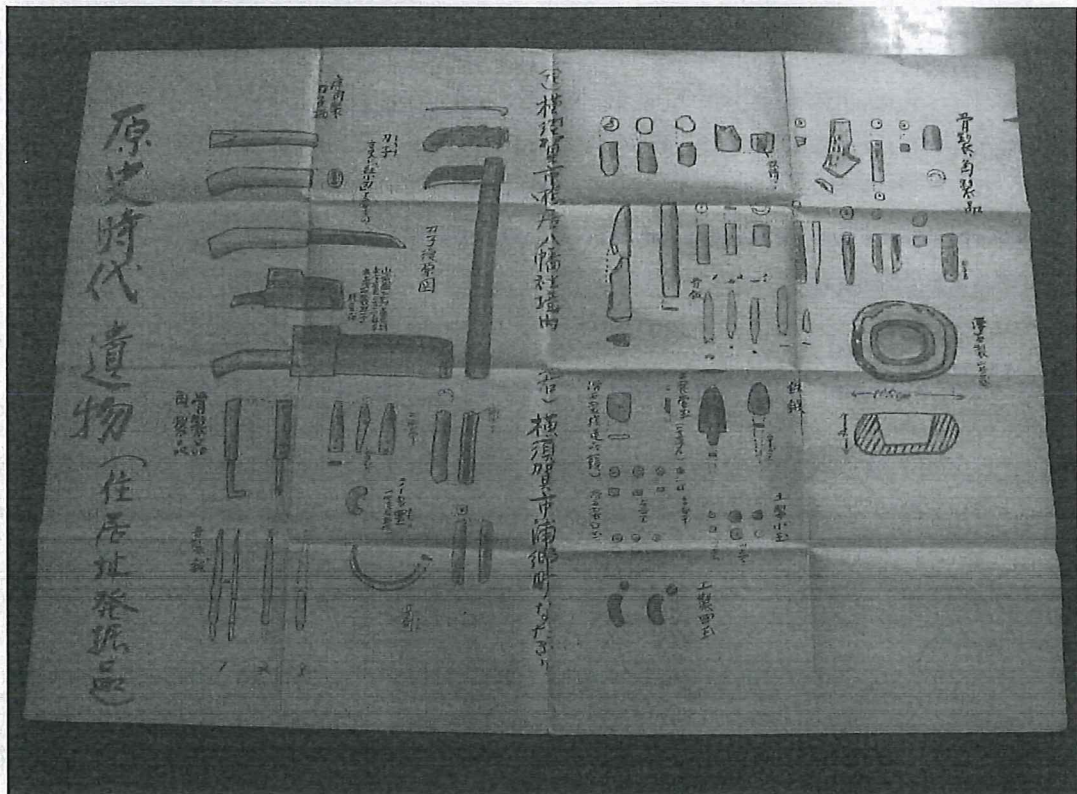


写真2 鴨居八幡社境内・たがぎり出土遺物スケッチ

年報番号 横須賀市 03011 走水神社宝物

1. 赤星ノートの内容

走水神社の祭神は日本武尊とその後弟橘媛命の二柱で、神社の創建については享保年間の火災で記録や社宝が消失し不明とされる。ただ、伝説では景行天皇の御代、東夷征討の命を受けた日本武尊から村民が冠を賜り、石櫃に納めて、社殿を建てて尊を祀ったことに始まると伝わる。

ノートの資料には有形文化財台帳（調査報告書）〔横須賀市教育委員会〕と実測図3枚がある。台帳には曲玉の詳細が記載され、実測図には①曲玉2と金環1、②提瓶1、③フラスコ形長頸瓶1が描かれている。
〔調査(踏査)年月〕

文化財台帳には、総合調査の年月日として「昭和51年12月12日」、調査者「赤星直忠」と記される。『横須賀市文化財総合調査報告書』を刊行する際の実地調査であったと推察される。

〔資料保管場所〕

文化財台帳には「走水神社 走水■■■■」と記されるが、氏子の方への聞き取りでは(平成25年1月3日現在)、観音崎自然博物館に納めたとのことであった。しかし、同館学芸員の方も所在は知らず、その後の横須賀市自然・人文博物館への聞き取りでも所在は不明であった。

〔記載内容概略〕

文化財台帳には曲玉の詳述があり、所見には「木箱に金銅環と2個の曲玉が納められているので、何れの曲玉が伊勢山崎出土か不詳」と記される。伝来には「同じ木箱に納められており、次の如く社務所口にある。1個は明治39年走水伊勢山崎海岸より発見。1個は明治41年走水低砲台(旗山)海岸より発見」とある。法量は「(1)長2.9cm淡鉛色、(2)長3.1cm鉛色」、品質は「(1)頭がやや大きい(淡鉛色の方)、(2)コ字形(鉛色の方)」とされる。

実測図は3枚あるが、①曲玉・金環には、玉類箱蓋裏の墨書として「明治41年海軍発電所工事ノタメ走水伊勢山元神明社社跡ヨリ発見」とあるが(誤りと判定する)と書かれている。また、伊勢山崎海岸発見のものには「伊セ山3」とあり、もう一点の曲玉には「走水低砲台海岸」と記される。

金環は「金環1個 金(銅?)環 径6分 明治39年伊勢山崎より発見」「伊セ山2」とあり、いずれもほぼ実寸大の図が描かれる。その他、土器の情報として「陶焼平形径8寸 大正13年字瘤ノ木より発掘(提瓶)」「陶焼丸形径5寸 明治35年伊勢山崎より発掘(フラスコ形長頸瓶)」とある。

土器のうち、②提瓶は「走水神社宝物」「須恵器環耳付提瓶」「大正13年字瘤ノ木ヨリ発掘」「高27cm、胴径23.8cm、厚14.9cm、口径10cm」と記され、図がほぼ実寸大であることがわかる。③フラスコ形長頸瓶は「走水神社宝物」「須恵器退化横瓶(口縁欠一平にすっている)」「明治39年伊勢山崎より発掘」「高17.5cm、胴径16.2cm、15.2cm」「伊セ山1」とあり、こちらもほぼ実寸大である。

2. 記載資料の整理

〔遺構・遺物概要〕

曲玉は2点で淡鉛色は頭がやや大きく、鉛色はコ字形と評されている。長さは2.9cmと3.1cmで、いずれも瑪瑙製とされ、図での欠損等はみられない。総合調査報告書の写真からは、肉厚な身であることが窺える。金環は1点で金銅製とされ「金色少々残る」と記される。外径は最大2.1cm、内径1.1cmで、環の直径は0.5mmほどである。

提瓶は環状の把手に存在感があり、大振りである。器高は27 cm、口縁部高は5 cm程度で、体部は片側が扁平で口縁部が短いという特徴がある。フラスコ形長頸瓶は体部から頸部の一部まで遺存し、胴部最大径は16.2 cm、頸部端は「平に擦られている」ために長さが不明である。図からは成形の指あとが縦方向に観察される。

[掲載図書]

横須賀市教育委員会 1981『横須賀市文化財総合調査報告書』第1集 一浦賀地区一

[掲載図書概略]

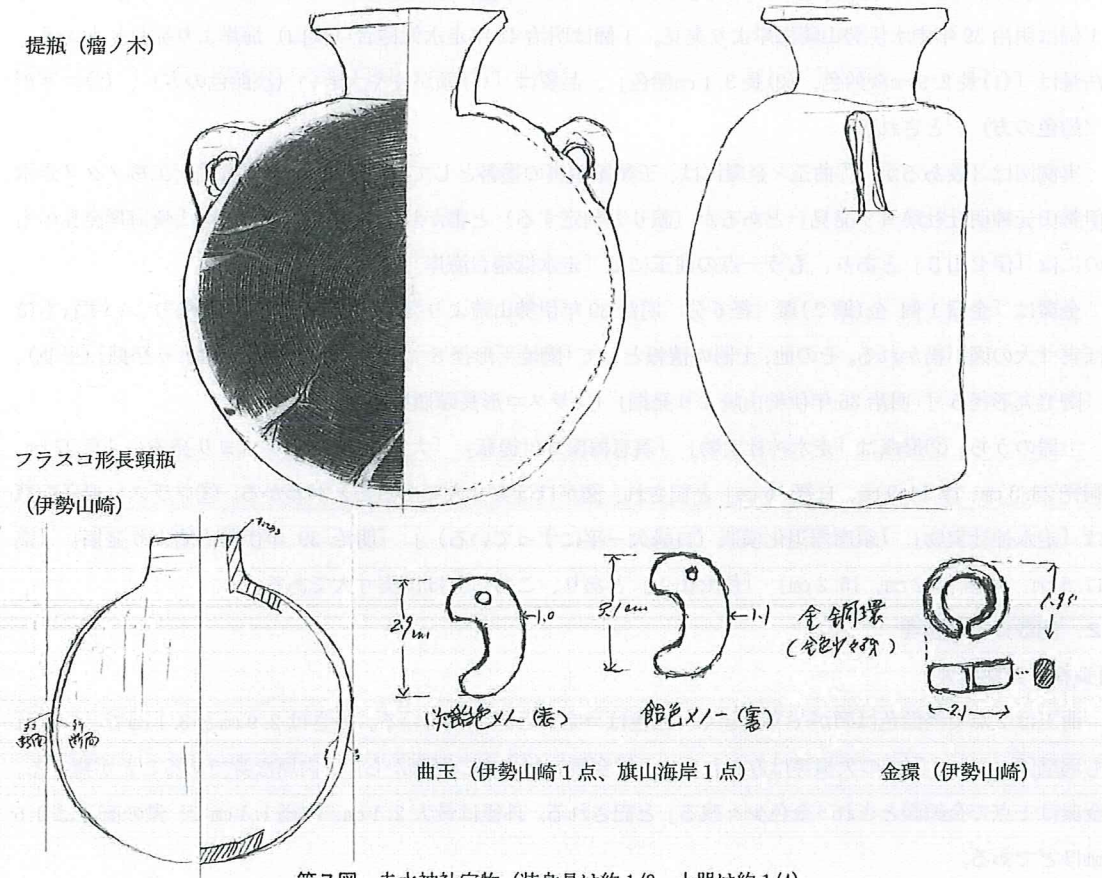
先にふれた遺物に関する概要が記されるとともに、全ての遺物の写真が掲載されている。

[小結]

横須賀市の走水神社の周辺には、伊勢山崎横穴群 (No.304)、瘤ノ木横穴群 (No.328)、入の奥横穴群 (No.402) など多くの横穴墓群が存在している。図にメモされた「伊セ山1・2・3」という記述のものは伊勢山崎や入の奥横穴群付近で、字瘤ノ木と記される提瓶は瘤ノ木横穴群が近く、他の曲玉は旗山海岸との記述から旗山崎台場跡 (No.109) 付近であったことが窺える。旗山崎には走水低砲台が明治19年に竣工されるが、箱書きの「明治41年」からは起工時出土とは思われない。走水神社氏子の方の話では、神社前面の道路は軍用として整備されたといい、これらの遺物はその際に出土したことも想起される。

提瓶に限れば、器形からおよそ6世紀後半代という時期があげられる。これを横穴墓出土遺物と仮定すれば、県内において築造が始まる初現的な時期の遺物とみなすことができる。

なお、本調査には稲村繁氏 (横須賀市自然・人文博物館) のご協力を得ましたことを申し添えます。(柏木)



第7図 走水神社宝物 (装身具は約1/2、土器は約1/4)

研究紀要18

かながわの考古学

発行日 2013(平成25)年3月26日

発行 公益財団法人かながわ考古学財団

〒232-0033 神奈川県横浜市南区中村町3-191-1

TEL:045-252-8689 FAX:045-262-8162

<http://kaf@kaf.or.jp>

印刷 アンクベル・ジャパン株式会社

KANAGAWA NO KOUKOGAKU

Vol.18

(Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation)

CONTENTS

Project Team for Paleolithic Studies: Paleolithic Artifacts in Kanagawa Prefecture Distribution (6) Layer B2	1
Project Team for Jōmon Period Studies: Change of the Jōmon Culture in Kanagawa Prefecture (IX): An Example in the first part of Late Period. An Aspect of the Horinouti-Type Pottery Period, Part 4	11
Project Team for Yayoi Period Studies: The Corpus of Yayoi pottery-Coffin in Kanagawa Prefecture(2)	23
Project Team for Kofun Period Studies: Track of Dr. Naotada Akaboshi, A Pioneer of Archaeological Research in Kanagawa Prefecture (10): A Report of Materials of the Kofun Period in the So-called "Akaboshi Note"	34
Project Team for Nara-Heian Period Studies: Hardware in the Nara and Heian Periods in Kanagawa Prefecture: The Corpus of iron manufacturing artifacts (3)	44
Project Team for Medieval Age Studies: Castle Site in the Medieval Age in Kanagawa Prefecture (5)	71

March, 2013

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama, Japan